

チェルノブイリ通信



発 行

チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連 絡 先

福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 (株)ウインドファーム内

T E L ・ F A X 093-203-5282

E-mail jimu@cher9.to

URL http://www.cher9.to/

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



* チェルノブイリに関わる人々

医療通訳・コーディネーター 山田英雄さん

* カーチャ先生を偲んで

* のぞみ21の民芸品にまつわる情報あれこれ

* 飯倉小学校訪問

* 「映画を撮りたい」 本橋成一監督

* 映画「ナージャの村」に寄せて

* チェルノブイリ支援コーヒーご案内

* 走れ！雪だるま号 三上鍊子さんからの報告

* ベラルーシからの手紙 第2話

切尔ノブイリに関わる人々 移動検診をつなぐ人のつながり

医療通訳・コーディネーター

山田 英雄さん



検診現場にて、通訳する山田さん（右端）

一九六八年、社会主义への憧れと、原爆の後遺症で苦しむ母を助けたいという想いを胸に、高校卒業後、旧連の医師免許を持つ医療通訳だ。唯一であるが故に、代わりがない。

一九七五年に帰国。日本の医師になるべく、国家試験を日指していた頃、 Chernobyl 原発事故が起きた。

その後、現地の女性と学生結婚して、子どもも授かり父親になつた山田さんは、

本側、ベラルーシ側の関係者を通じて、ただ一人だけ、そのすべての検診に参加した人がいる。

山田英雄さん、日本で唯一、旧ソ

ソ連のパトリス・ムルンバ名称記念民族友好大学医学部に進学した山田さんは、「最初の頃は、何言いおるんか、さっぱり分からんかった」という状況のなかで、ロシア語と医学の知識を脳に練り込んでいく。

過去、七回ほど山田さんとベラルーシに行つた運営委員は、辞書を引く山田さんの姿を見たことがない。「辞書は持つてきているんですか」と問うと、「いや、持つていってないよ」ときっぱり。

せない人となる。
不思議なことが一つ。

「検診中、分からぬ単語とかないの？」と聞くと「ある」という。だが、山田さんによれば、「辞書を引いて調べるよりも、現地の人間に聞いて学んだ方が、よっぽど語学力がつく」。そして、「大切なのは、確かなことを教えてくれる人が現地にいるか、どうかなんよ」と言い切る。

それは、単に言葉のやり取りだけに限つた話ではない。「過去、五年間、ベラルーシで行われてきた検診も、結局信頼できる人のつながりがあつてこそものでしょ」

切尔ノブイリに関わる人でなければあまり耳にしないベラルーシという国の、しかもその地方の病院で、日本の医師が甲状腺の検診を行う。と、言葉にしてみれば、ただそれだけのことをするための下準備は大変

なものだ。いきなりベラルーシの病院を訪れて検診が実施できるはずもない。

どこに検診を必要とする病院があり、どんな機材が不足しているか？

検診を実施するうえで大切なのは、こうした基本的なことについて、「確かなことを教えてくれる人が現地にいるか、どうか」

そうでなければ、せっかくの医療物資も病院の片隅で使われないまま置き去りになってしまう。

チエルノブイリへの支援が始まった当初、山田さんは支援の内容と、現地の状況がかみ合つてないことに驚いたという。現状を知らずに、気持ちばかり



検診結果を現地の医師と確認する

先走る「支援の押しつけ」にならないようにするために、山田さんは、現地との深いつながりを作るよう心がけていく。

「これが、ぼくの財産、これなしには何もできないからね」とある日、山田さんは小さなアドレス帳を取り出したが、そこには、きめ細かなロシアの文字で名前と住所、電話番号がびっしりと書き込まれていた。

まさに、そのつながりのなかで、適切な医療支援が実施されていくのだ。

日本の医療関係者が、スムーズに検診活動を行える環境を現地で整えるのも、山田さんの仕事だ。日本側の医師や臨床検査技師の要望を受け止め、それをベラルーシ側に伝える。日本から電話で情報交換するためには、時差の都合で深夜に連絡しなければならない。日本側の要望を強く押しつけ過ぎないよう、かつお互いが気持ちよく検診に取り組めるようにするために、バランスよく言葉をつなぐ。

過去、五年間の検診を振り返って、山田さんは「とにかく継続してこれたことが、一番大きい」という。「継続することで、また人のつながりが豊かになってきた。五ヵ年計画を終えて、今度はプレストに新たな拠点を作れるのも人のつながりがあつて実現できることだから。」

山田さんのフィールドは、チエルノブイリだけに限らない。うつすらと記憶に残る原爆で破壊された

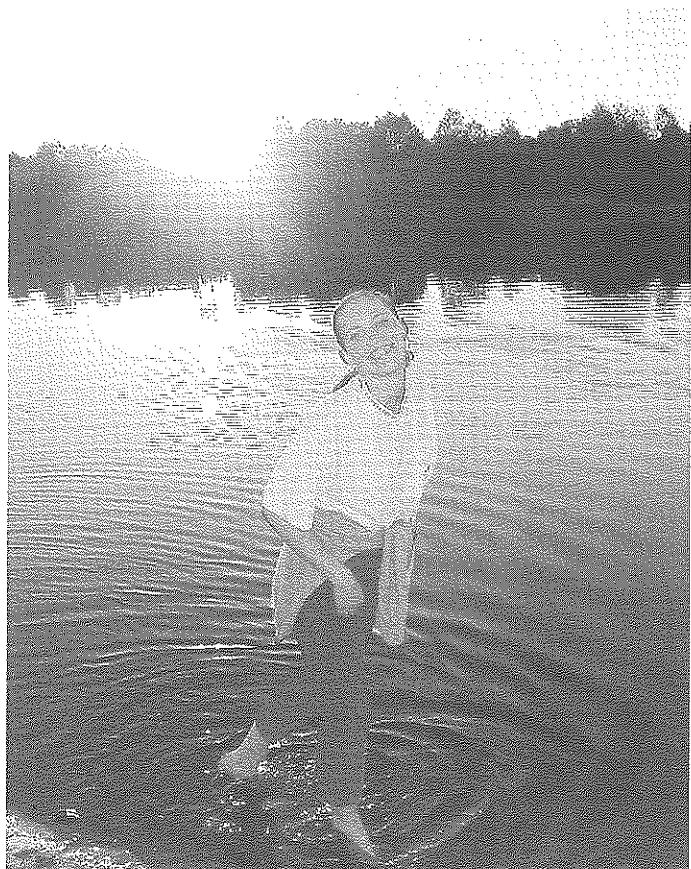


日本とベラルーシの間での仕事が続く

広島の街。それは、山田さんの原風景となり続け、そこから地球上に数多く残る「核」の問題へと視野は広がる。チエルノブイリ、そして現在はカザフスタンの核実験の被害者へとさらに活動のフィールドは広がっている。

今後の抱負は、「モスクワに移住してゆっくりしたい」と言うが、医療コーディネーターとしての忙しい日々は続きそうだ。

カーチャ医師を偲んで



チエルノブイリ支援運動・九州の活動に関わるすべての人々にとつて、悲しいお知らせがあります。

これまで、ベラルーシでの移動検診に参加して頂いていたカテリーナ・カブスティーナ医師（愛称カーチャ医師）が、今年一月、ガス漏れ事故による火災のため、亡くなられました。生後一ヶ月の彼女の子どもも一緒にしました。

このページに掲載されている写真は、チエルノブイリ通信 四七号の表紙を飾ったもので、皆さんの記憶にも残っていると思いますが、この写真に写っている女性がカーチャ医師です。この素敵な写真は、運営委員の津島さんが撮影したもので、とても好評だったのですが、まさか再びこのようない形で掲載することになるとは、思っていませんでした。

チエルノブイリ支援運動・九州の医療支援活動は、ベラルーシと日本の医療関係者による共同作業により成り立つており、年々、相互の信頼関係は深まっていきました。検診活動を継続させていくうえで、それはとても重要なことなのですが、カーチャ医師は誰よりもそのことに配慮してくれていました。

「日本の医師が来てくれるのが、とても嬉しい」とカーチャ医師はよく言っていたと、医療通訳の山田さんが涙声で教えてくれました。検診中の誠実な仕事ぶりに加え、検診のない日にも、自宅に招いてくれたり、ミンスクの街を案内してくれたりと、私たちをもてなしてくれました。

私たちがベラルーシを離れても、メールや手紙を送ってくれるカーチャ医師は、だから私たちにとって最も身近なベラルーシの医師でした。

そして、昨年、自分が母親になつたことを私たちに知らせてくれていた直後の、この悲報です。

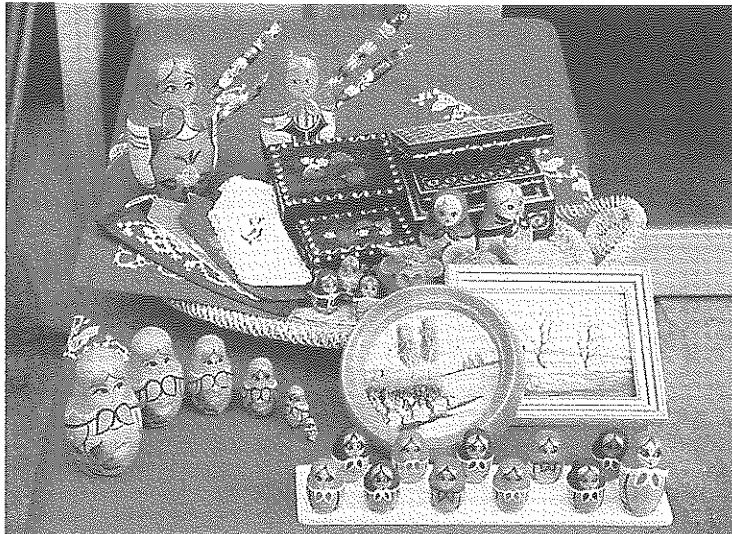
私たちチエルノブイリ支援運動・九州の活動は、たくさんの人々のつながりのなかで育まれています。そのつながりが豊かであるほどに、その喪失の悲しみは深いということに、今更ながら、気付かされました。

カーチャ医師のご冥福をお祈りしたいと思います。

チエルノブイリ支援運動・九州 代表 矢野 宏和

のぞみ21の 民芸品

にまつわる情報あれこれ。



作品たちに会える場所。

福岡YWCA（福岡市中央区舞鶴2-8-15 ◆地下鉄赤坂駅下車3番出口より徒歩5分）内のフェアトレードショップ「ダブルピース」で、のぞみ21の作品を扱っております。ぜひお立ち寄り下さい。

ホームページ「ベラルーシ料理と民芸品の部屋」。

<http://www.cher9.to/mingei/>

チャルノブイリ支援運動・九州のホームページで、のぞみ21の作品を見るようになりました！遠くにお住まいの方も、メール・電話・FAXでご注文いただけます。また、このページでは毎月ベラルーシ料理のレシピが更新される予定です。今夜の夕飯に、ベラルーシの味を添えてみませんか？

ブース出店。

2月23、24日福岡県北九州市AIM（アジアンポートマート）にて行われた「冬のあったカーニバル」に出店の様子。こうしたイベント出店には、いつも素敵な出逢いがあります。どこどこのバザーで民芸品を売ってほしい、もしくは自分たちで売りたい、など、バザー情報もお待ちしています。



日本の子どもたちと Chernobyl

福岡市立飯倉小学校で授業

2002年2月27日、運営委員・津島朋憲と事務局・谷口恵は、福岡市立飯倉小学校の6年生の授業でChernobylやベラルーシ、わたしたちの活動についてお話をしました。子どもたちは「世界の中の日本」というテーマで学習をしています。

教育機関として、ひとつ一つの形を持っている学校でも、最近では僕のような人間の話を授業中に聞こうということになつたりする。時代も変わったものだと思う。努力や根性を基本にして何かを積み重ね、その蓄積の結果、何らかの実を収穫しようとする生き方は、明確に時代に否定されつつある。そういう意味では、この数十年間は、人類史上まれにみる「形の努力と蓄積が実る」価値が絶対に近かつた時代だったのだと判断できる。努力が出来ない僕は、その価値観の中でいつも周囲にさいなまれてきたし、期待に添えるように、からまわりもしてきた。

ただ、努力と意識していくなくても、人の役に立ち自分の人生の蓄積とすることは可能だ。出発点さえ間違つていなければ、この生き方にも色々良いところがある。たとえば「……ねばならない」という活動の形態では、大儀は大切に出来るが、多くの人がそこに参加するときのハードルを感じる羽目になる。最近では様々な団体・目標・充足感がそろつてきた日本の市民運動は、そうした大儀でなんらかの目標を追求する以外の価値を求めても良い時を迎えている気がする。

「なんで Chernobyl 支援運動・九州に開催用貧乏と言われ続けた僕自身が、何かに流れ



最初に3クラスを前にして30分、各クラスを前にして30分の時間構成で、子どもたちがはつきり知らないかもしれないそれぞれの言葉を対話しながらしっかりと説明する時間がなく、ゆっくりクラスの雰囲気を整える事もできなかつた。だから、自分としてはあまり出来の良い授業ではなかつたようになつてゐる。

ただ、長目に時間を確保してもらつても、関わる時間は人生全体から考えればわずかな時間だ。だから、僕が教室から出た後、その人生について子どもたち自身が何かを考えようとするとき、話したことが心の隅に引っかかり続けてくれさえすれば、という想いで授業をした。効果のほどは神のみぞ知る。

これからは子どもたちが色々な生き方をしている人に触れる機会が、もつと増えればいい。知識より思考力が大切と言われて久しいが、こういう機会が思考に根ざすきっかけになると思うからだ。そうして、一人一人の人生が、地域、世界が豊かになつていく未来を想像し、信じ、現実のものとしたい。それが本当のプラス思考なのだから。

されながらあるひとつの活動に出会つて携わり、そこで得た何かを伝えていく位置に立つてることを改めて実感した。今回の授業では現地での様々なトラブル、英語を勉強することの大切さなど、知識ではなく、何かを考えるきっかけになるようなことを伝えたつもりだ。

運営委員

津島 朋憲

「ベラルーシ」という国の話を聞くのは
初めての子を多かったようですが。小学校6年生と
いえは、 Chernobyl 原発事故の3年ほど後に
生まれた子どもたち。ちょっと複雑しい話をあわせ
て、「どうぞ聞いてくださいが、一生懸命聞いてくれました。」



出張勉強会 講師派遣します！

支援活動の経験者と共に考えてみませんか？

Chernobyl 原発事故やその後のベラルーシの状況、Chernobyl 支援運動・九州の活動などについてもっと知りたいと思っているみなさん、今回の稻倉小の授業のよう、Chernobyl 支援運動・九州から講師を派遣します。学校の総合学習のテーマとして、お茶の間自主勉強会のスペースに、医療を勉強する学生さんたちの研究材料として…。生きた情報を活用してみませんか？話の内容、難易度、費用などはご相談に応じます。お問い合わせは、Chernobyl 支援運動・九州事務局まで電話・FAX・e-mail でお気軽にどうぞ。



1986年4月26日、旧ソ連（現ウクライナ共和国）のチェルノブイリ原子力発電所において大爆発が発生しました。大気中に拡散した放射性物質は北半球全体に広がり、特に隣接したベラルーシ共和国は高度の汚染地帯となりました。

「ナージャの村」は、今もこの地で暮らす6家族を1年間追ったドキュメンタリー映画です。豊かな文明に囲まれた私たちと、移住を拒み汚染地域で生活する家族。この映画を通して、もう一度生きていくことの厳しさ、大きさを考えるとともに、現地で活動するNGOを知ることにより、国際協力の必要性を学んでみませんか。

(財) 北九州国際交流協会異文化理解促進事業“チェルノブイリは今～「ナージャの村」を見て考えること”(2002年3月17日開催)のチラシより。このイベントではチェルノブイリ支援運動・九州矢野代表による活動報告、映画「ナージャの村」上映。本橋成一監督による講演が行われる。

「映画を撮りたい」 ～アルカジイ・ナボーキンに捧げる～

出典 サスナフィルムホームページ

<http://www.ne.jp/asahi/polepole/times/sosna.htm>

人の村人はすべて移住したが、ナボーキンさんは頑として移住を拒否した。当時二頭だった牛は増え続け、そのとき二七頭になっていた。「この牛たちに牛乳をもらつて、自分で時いたじやがいもを食べているよ」これが初対面のぼくへの、ナボーキンさんの最初の挨拶だった。そ

ぼくが初めてアルカジイ・ナボーキンさんに会ったのは一九九五年四月下旬のことだった。チェルノブイリ原発事故でもっと汚染されたベトカ地区のバーブジエ村にひとりで暮らす、いわゆるサマショーロの老人である。

事故後、政府の指示で三〇〇

そのとき、老人はどうしてそんなことを聞くのか、という顔をして「どこへ行けというのか。人間が汚した土地だろう。」と答えたのだつた。それはぼくにとって強烈なひとことだつた。まるで他人ごとのようなその愚かな問い、そしていつの間にか、地球上にやさしくなどという傲慢なことばを、平氣で口にしてい



映画「ナージャの村」監督
本橋 成一

1940年生まれ。
自由学園卒業。写真家。
九州、北海道の炭坑の写真で第5回太陽賞を受賞。
主な著作に「炭坑(ヤマ)」「上野駅幕間」「サーカスの時間」「ふたりの画家」「老人と海」「無限抱擁」などがある。

最新監督作品「アレクセイと泉」で、2002年2月第52回ベルリン国際映画祭ベルリーナ新聞賞受賞。

た自分が恥ずかしかつた。

その日、仕事を終えたナボー

キンさんはぼくを家の中に招き

入れ、もう五〇年も弾き続けて
いるというアコーデオンを聴か

せてくれた。ところどころカタ
カタという音しか出ない壊れた
キイ。思うように動かない指。

しかし、その一曲一曲は妙に存
在感に満ち、まるで彼の八三年
の人生そのものを歌っているか
のようだつた。

ぼくはこのとき彼のアコーデ
オンを聴きながら、ひどく感
動してしまつた。あえて汚染さ
れたこの地で生きるナボーキン
さんの姿は、大地を汚したもの
への無言の抗議であり、現代に
生きる人間への痛烈なメッセ
ージに思えた。そして、それはそ
の場に居合わせたぼくに対する
メッセージでもあつた。彼は自
らの肉体をもつて、そのことを
訴えかけていたのだ。

ぼくはそのとき、なぜか映画
というひとつのことばで、多く
の人にこのメッセージを伝える

ことができたらすばらしい、と
思ったのだった。

帰国してからさつそく友人た

ちにナボーキンさんの写真やハ
ミリビデオを見せ、あのカタカ

タと鳴るアコーデオンの音色を
聴かせながら、この映画づくり
の夢を語つた。撮影、録音、編
集、そして資金集め。映画づく
りは、決して一人ではできない。
だからこそ大きな夢を語り、そ

の年の暮れ、ようやく夢が実現
に向けて動き出した。四人のス
タッフとともにロケハンを兼ね
て、ナボーキンさんを訪ねたの
は年が開けてすぐの冬のことだ
った。

一九九六年四月、撮影は始ま
った。春夏秋冬一二〇日余りの
ロケの中で、撮りためたフィル
ムは、四四、五九〇フィート。
この二〇時間三八分の切り取っ
た時間を前にして、ぼくはとて
も満足している。この満足はぼ
くのみならず、スタッフの皆、
そして映画を応援してくれてい
る人たちに共通の思いでもあ
る。この映画の舞台となつたド
ウヂチ村の村人たちの暮らしぶ
りを観ながら、ナボーキンさん
の残したメッセージを受け取つ
てもらえたうとも嬉しい。

つた、と思った。しかしほく
はどうしても、ナボーキンさん
から受け継いだメッセージを置
き去りにすることはできなかつ
た。

チエルノブイリ支援運動・九州 第12回総会のお知らせ

会員のみなさまと運営委員が共にわたしたちの活動を見つめ、あり方を確認しあう機会です。みなさまの募金がどの様に活かされているのか、現状がどうであるのか、普段は顔を合わせることの少ない運営委員と向き合ってぜひご確認下さい。また運営委員にとっても、皆様とお会いして生のご意見を伺えるのはこれから活動にとって、大変重要な機会となります。ぜひご参加ください。

日時：3月31日（日）14:00～

場所：北九州市八幡西区オリオンプラザ4F会議室

（JR鹿児島本線折尾駅下車すぐ）

Tel 093-691-5653

内容：2001年度活動報告

2002年度の取り組み

運営体制、予算・決算報告

映画「ナージャの村」に寄せて

あの、小さなあかりのなかへ

映画「ナージャの村」が発するメッセージ

文／矢野宏和

「絵を描きたいな！」学校の授業以外絵筆を握ったことなどほどんどないくせに、ガラにもなく、私はそう思つた。

あのとき、陽はもう落ちようとしていた。

ベラルーシの大地を、静かに闇が覆い始める。と、点在する家屋に、あかりが浮かぶ。ほつり、ほつり、と。橙色のような温かみを帯びたその色彩。それは、まるで暖炉の炎のように揺らいでいた。

「あのぐらいの明るさで、いいんだよな」と、どこからともなく声がする。

闇の向こうのどこかの平原に今も佇み放射能を吐き続ける巨大な石棺と、車窓を流れゆく小さな灯火と。あの灯火のなかの生活空間は、原発などなくとも成り立つ土に根ざしたものなのに、なぜ、この大地が原発の放射能で汚染されてしまつたのか。

初めてベラルーシを訪れた五年前、私は大地に降り注いだ放射能に怯えながら、しかしこの大地の営みに憧れ、絵心がないにも関わらず、ただ無性に絵が描きたくなつた。陽が大地を照らすにつれ、風景はさらに広がる。

森のなかで、陽光のなかで、老人は丸太小屋を作つていた。釣り糸が伸びるその先の浮きを見つめる少年を、とりまく川辺の静寂。

樹の家を取り囲む菜園の、その入り口のベンチに腰掛けて談笑する主婦たち。

そして、平原に漂う家のあかり。

あの、あかりのなかへ、一度だけ私は入つたことがある。だから私は知つていて。あかりのなかの豊かで暖かな生活を。すべてが絵物語のようで、叶うことなら、その様を絵にして表現したかった。

だが、私が見たのは、夏の一日の時季に過ぎない。

昨年、「ナージャの村」を観たとき、次々と現れてくる光景に心ときめかせながら、一方で私が全く触れることのできなかつた生活の厳しさや失われし故郷の悲哀に触れて、その映画の奥深さを感じた。

そして、また思った。「絵を描いてみたい」しかし、表現する技術も、あのあかりのなかの生活を丹念に取材していく力もない。私にできたのは、その世界の眞似ごとをすることがだつた。帰国後、私は畑を借り、ログハウスのキットを購入し自分で建て、川を愛でた。蛍光灯は使わず、小さなクリップライトの明かりで過ごし、現在は蠅燭の使用も検討中だ。

最大の原発事故の、その最大の被害を受けたベラルーシという国の生活を模倣し、原発を必要としない生活スタイルを目指す、というのも何だかあべこべのような気がするが、あの大地

からは、感性を触発するようなるメッセージが確かに発せられているのだ。

メッセージの受け止めようは、それぞれの人々もあれば、新たなる創造的行為を引き起こす源になることもある。本橋成一監督の映画作りが、あの大地からのメッセージを受け止め、そこから始まつたように。

「ナージャの村」を観た人は、きっとベラルーシの大地を散策するような体験をすることになると思う。その結果として、あの大地から発せられるメッセージを受け止めることになるはずだ。

きっと、そこから新たな変化が生まれる。原発事故の現状や支援の内容を説明し、支援カンパを募つたり、反原発を訴えていくような直接的な言葉ではなく、人それぞれの感性に訴え、多様な変化を引き起^こす、それが「ナージャの村」が発するメッセージの性質だと思う。

三月一七日に「ナージャの村」の上映会があり幸いに私も参加することになつている。

私はまた思うのだろうか？「絵を描きたい」と。そうであれば、今度こそ、絵筆を握るぐら

いのことは、実行したいと思う。これほど、感性を刺激する映画も、そうそう観られるものではないのだから。

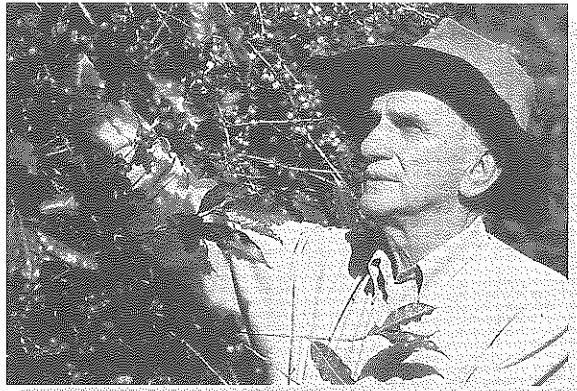
有機無農薬の「チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶」は、引き続き販売しております。

『マトリョーシカ風人形付き
・チエルノブイリ支援コーヒーセット』
ご好評につき、完売いたしました。
どうもありがとうございました！

おいしいコーヒーを飲むことで、ベラルーシの人達を支えることができます。
どうぞお試し下さい。

一度、飲んでみませんか？

カルロスさんがブラジルで育む
有機無農薬 ジャカランダコーヒー



チェルノブイリ支援コーヒーとして販売されるジャカランダコーヒーは、ブラジルで農薬や化学肥料を一切使わずに育まれた有機栽培のコーヒーです。

自然や人を大切にしたいという想いから、コーヒーの有機栽培に取り組み始めたカルロスさんですが、チェルノブイリ原発事故についても「同じ地球に住む人間の問題」として積極的に関わり、作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」のポルトガル語版の作成においても、惜しみない協力を頂いております。

チェルノブイリ支援コーヒー

(有機無農薬ジャカランダ農場産・200g)

775円

チェルノブイリ支援紅茶

(有機無農薬南インド紅茶・100g)

485円



5パック未満のご注文は送料200円

合計注文数が5パック以上の場合は送料無料

売り上げの一部がチェルノブイリ支援へのカンパとなります。

コーヒー・紅茶に関するお問い合わせは、チェルノブイリ支援運動事務所まで

電話／093-203-5282

チエルノブイリ紀行

一パレーシアのきらめく星々

文／三上 錬子

チエルノブイリ支援運動・九州による検診だけでなく、日本のチエルノブイリ支援団体が現地で活動する際にも貴重な移動手段として利用されている「雪だるま号」。その「雪だるま号」の働きを通して、様々な団体の活動をお伝えするのがこのシリーズ。今回は三上錬子さんからの報告をご紹介する。



昨年の九月に、ベラルーシのモーゼズリ市を訪れた。モーゼズリ市は、チエルノブイリ原発から北へ八〇キロに位置する人口二三万人の街である。この街に「パレスカヤ・ゾーラチカ」（パレーシア地方の小さな星）という少年少女音楽舞踊団がある。

パレスカヤ・ゾーラチカの存在を知ったのは、一昨年（二〇〇〇年）のことであった。菅谷昭医師の橋渡しにより、九九年に来日し、その可憐な歌と踊りで聴衆を魅了したという記事を読んだ。菅谷医師については、九六年から五年半ものあいだベラルーシに滞在し、小児甲状腺がんの治療にあたつたことで、すでに日本では広く知られている。

一昨年の初秋に、ベラルーシのゴメリ市を訪問し、ゴメリ州立腫瘍センターで働いていた菅谷医師にお目にかかることができた。いろいろな話をうかがつた中で、チエルノブイリの惨劇を不幸の箱に押し込めるのではなく、少しでもプラスの方向に転化し、未来を担う日本の子どもたちとベラルーシの子どもたちを、対

等・平等の立場で交流させたいといふのが、菅谷医師の強い願いであることを知ることができた。

ゾーラチカの子どもたちは、昨年も来日した。猛暑の中、七月三一日に総勢二四人が来日し、長野県を始めとして、東京など四地区で公演を

した。私は菅谷医師の思いに賛同し、東京公演の実行委員の一員として末席に連なった。子どもたちの公演は、

踊りや歌の巧みさ、衣装の美しさ、そして豊かな表現力、芸術的センスなどで観客を魅了した。子どもたちの印象深かったことは、長野県でホームステイをしたこと、そして、東京ディズニーランドだったという。

「おとぎの国・ヤボーニア」は、子どもたちの目にはどう映ったのだろうか。

子どもたちは、放課後にやつてきて、元気に、懸命に練習に励んでいた。一時間以上にもわたるレッスンは、けつこうハードなものであつた。中には、未来のプリマ・バレリーナ

「生」だけれど、私はムチーテリニツツア（先

生）・ペトローヴナは、「ダンスを教えてくれる子どももいた。エレーナ・ペトローヴナは、「ダンスを教えてくれるのはウチーテリニツツア（先

生）だけれど、私はムチーテリニツツア（思い悩む人）よ」とジョークを言い、ため息をついていた。ゾーラチカの運営は、資金面など、さまざまな面で大変なようだ。だが、维テラ・ウラジーミロヴナといふいという思いが募った。八月中旬過ぎに、私はモスクワ経由でウクライナへ向かった。オデッサからキエフに行き、それからベラルーシのゴメ

リ市へ行つた。さらに、ミンスクへ行き、モスクワ経由でキルギスタンのビシュケクへと飛んだ。そして、メリからモーゼズリ市へ行つた。ゾーラチカの事務所や稽古場がある建物には、宿泊できる快適な部屋がある。そこに二泊した。そして、ゾーラチカの懐かしい、かわいい子どもたちと再会することができた。

子どもたちは、放課後にやつてきて、元気に、懸命に練習に励んでいた。一時間以上にもわたるレッスンは、けつこうハードなものであつた。中には、未来のプリマ・バレリーナを思わせる子どももいた。エレーナ・ペトローヴナは、「ダンスを教えてくれるのはウチーテリニツツア（先

イタリア公演から戻った直後だったが、忙しい中でも笑顔を絶やさずに、心から私をもてなしてくれた。

ゾーラチカの本部のある建物の中に、は、チエルノブイリ医療基金（C.M.F.）の事務所があり、そこでは医療検診を行なう事もできるようになっていた。

ゾーラチカの事務局がある建物には、展示室もある。海外公演の際に、プレゼントされたものが展示されており、その中で最も多いものが、日本からものであつた。数々の日本を代表する品々の中に、立派なお内裏さまとお雛さまが一組あつた。日本でそれを包装するのに、日本人は白い手袋をはじめ、丁寧に包んでくれた事が驚きだつたという。その人形の埃を掃うための柄の短い羽叩きが何を意味するのか分らぬに、エレーナ・ペトローヴナはしばらくの間、それをお雛さまの横に立てて飾つておいたという。最近ようやくその用途が理解できたという、微笑ましい話もしてくれた。

菅谷先生が日本へ戻る少し前（二〇〇一年三月）に、信濃毎日新聞記者の山口裕之さんが一年間の休暇をとつて、モレズリ市へ来ていた。山口さん

は、すでに二〇〇〇年四月にモレズリを日本の子どもとともに訪問し、取材をしたという。

山口さんの目的は、ロシア語の勉強とチエルノブイリ支援だという。C.M.F.の事務局員として甲状腺検診活動の支援をしたり、ゾーラチカの子どもたちに日本語を教えたり、モレズリ市を訪れる日本人たちの世話をしたりと、大活躍をしていた。

モレズリ市は、落ち着いた雰囲気の穏やかな町である。山口さんとかつてのゾーラチカのメンバー・オリーヤの案内で、市内を見学した。この地域は泥炭地であるため、放射能が土壤にしみこみ、牧草を食べた牛のミルクがかなり汚染されていることをテレビで見たことがある。この美しい自然が放射能で汚染されていることを思うと、つらい思いにとらわれてしまう。ここに住む人々もまた、生涯、放射能汚染という恐怖を抱えながら生きていかなければいけないのだ。

わざか四日間という短い滞在ではあったが、充実した毎日を過ごすことができた。帰りは、「雪だるま号」に乗つてミンスクへ向かつた。この車は、

「雪だるま号」と威勢良くやつてきた。「雪だるま号」は、とても快適であった。ミンスクまでは、四時間足らずで着いた。

私の旅は四三日間、四カ国にわたつた。主な目的は、チエルノブイリのリクビダートルへの取材であった。八〇万人ともいわれるリクビダートルたちの現状を知りたかったのである。チエルノブイリ支援運動・九州の関係では、ミンスクのリューダの助けによつて、ふたりの女性のリクビダートルにインタビューをすることができた。ま

た、ゴメリ市では、工房「のぞみ21」を訪問し、ナターシャ・ステパン夫妻と再会し、交流を深めることができた。チエルノブイリ支援運動・九州は、この先、リクビダートルへの支援活動をも行つていくことを検討しているといふ。どんな形であれ、多くの苦しみを背負つているリクビダートルへの支援を続けることは、大変重要なことだと思う。チエルノブイリの惨劇を私たちは決して忘れてはならないし、日本

から、世界から原発をなくしていくようになればならないと、改めて強く感じた。

なお、パレースカヤ・ゾーラチカは、九三年九月に、チエルノブイリ支援運動・九州の招きで、来日していることを「チエルノブイリとともに一一〇年のあゆみ」（チエルノブイリ支援運動・九州編）を読んで知ることができた。

雪だるま号の利用をご希望の方は

ベラルーシでチエルノブイリ支援活動を行う際、国内の移動手段として雪だるま号の使用を希望される方は、チエルノブイリ支援運動・九州の事務局までご連絡ください。現地での使用目的、スケジュール等を申込用紙にご記入いただき、それをもとにミンスク赤十字に雪だるま号の使用を依頼します。

チエルノブイリ後を生きる

子どもたち～ベラルーシからの手紙

第2話

力丸 韶子

6月に第9回検診団としてベラルーシを訪れた矢野代表は、
日本からの検診団が来ていることを聞きつけて尋ねて来た小さな少女クラウディアから
「日本の文通相手に渡してほしい」と、プレゼントを預かりました。

日本に帰つて帰ったのはいいものの、つたない文字で書かれた名前と住所が読みとれない・・・
途方にくれていたところに、その「日本の文通相手」本人からご連絡がありました。

それが、力丸韶子さんです。

力丸さんは、今までに3回子どもたちを元気づけるツアーに参加し、ベラルーシを訪れたとのこと。
子ども達のことをよりよく知りたい、とベラルーシの子どもたちとの文通を始められました。
プレゼントを矢野代表に託したのは、その小さな文通相手のひとりでした。

子どもたちひとりひとりからは、今のベラルーシの姿が見えてきます。

4回シリーズ7、力丸さんのエッセイをご紹介します。

●手紙の途絶えたサーシャ

サーシャは、「外國の人から手紙をもらつたのは初めてだよ。ボクは嬉しい。ボクの手紙は何日くらいで届くの？ 日本のことを教えて。」と、喜びと好奇心いっぱいの手紙をくれた1人です。ていねいな活字体での読みやすい手紙がありました。

サーシャからの手紙には、「ボクは頭が痛いのです。」という言葉がいつもありました。三通目の手紙でしたか、「ママは、伝統工芸である刺しゅうを作るところで働いていたけれど、ボクの具合がよくないので、働くのを辞めて家で少しばかり刺しゅうをしています。今、ママが刺しゅうをしているその傍で、ボクは手紙を書いています。」と書いてありました。病気であることは、とても可哀想であるけれど、こうして母親と共に時間を過ごせるその生活は、ある意味で幸せではないだろうか、とその情景を思い描いてみました。

その年の暮れに、「ボクの体にはビタミンが必要なのに、食べ物を買うお金も、寒いのに洋服を買うお金もない」と書かれた手紙が届き、どうしてやつたらいいのだろうと心を痛めた末に、ホーレン草やあさりのインスタントスープ、乾燥ブルーンに杏を、セーターに包み込んで送りました。ステップの作り方は絵入りで、「お湯八分目」を示しての悪戦苦闘のレシピです。サーシャは喜び、「おいしかったよ。セーターは気に入った。ボクにぴったりだよ。」との便りに、ヤレヤレと胸をなでおろしました。

誕生日のお祝いが届いた時には、飛び跳ねている様子が見えるような喜びいっぱいの手紙をくれました。サーシャは、実際にこまめに手紙をくれました。

そんなサーシャからの手紙が、去年の夏を最後にピタリと止まっています。「頭が痛い」と書かれているうちに精神科医の診察を受けたと書かれるようになり、徐々に文字が変わり始めたように感じました。と、おどどしの八月、びっくりするほど神経質な文字が並び、本当にサーシャが書いたものかと信じがたい手紙がきて、それつきりです。

「サーシャ、お元気ですか？どうしていますか？」と、その後も私が手紙を送っていますが、何も返ってきません。（サーシャ、どうしていの！誰か、サーシャのことを教えて！）と呼びたい思いで、彼らの便りを待っています。

●アリヨーシャの笑顔●

サーシャから「お金がない」という手紙が届いた日に、もう一通、私の心を塞ぐ便りが一緒に届きました。アリヨーシャからのものでした。写真を送つてから五ヶ月経つての手紙で、住所が変わっていました。アリヨーシャ本人からではなく、母親からでした。

「写真ありがとうございます。アリヨーシャは喜んで見ていました」と始まり、「今、アリヨーシャはゴメリの病院からミンスクの病院に移り、入院しています。状態は良くなく、その命は風前の灯火です」。

（風前の灯火…どんなに辞書を引き直しても同じです。（風前の灯火…風前の灯火よね）と、私は幾度もつぶやいて胸がつぶれる思いでした。

アリヨーシャとは、九九年の夏に初めて会ったのですが、脊椎が曲がっていて、歩行も少し困難なようすでしたが、教室には一日おきくらいに出てきて、いつも笑顔を向けてくれていました。とても印象に残っている子どもです。母親からの手紙に、「どうしたらよいのか今の私にはわかりませんが、ただ、アリヨーシャの回復を神に祈り続けます」と返事を出しました。

その後のアリヨーシャは、ゆっくりゆっくり元気になりだして、時には畑に出てママを手伝つたりできるようになりました。それでも本調子ではなく、二〇〇〇年夏のサナトリウムには行かれないだろうと知らされていたのです。が、私が行った時には、なんとアリヨーシャの笑顔がそこにあつたのです。
あのびっくりの日から、アリヨーシャのママの手紙は十三通になりました。



たくさんの募金を

ありがとうございました

(敬称略・順不同)

めぐみ保育園職員一同 引田良子 渕田三輝 佐
野ミツコ 廣底裕子 日高礼子 大田澄子 三島
珠実 溝部小学校児童会 大窪彬子 高橋由紀子
矢ヶ部貞子 納富育代 守山美佐子 医療法人く
まがい産婦人科熊谷淳一 谷口美代子 ののはな
クリニック 吉谷八千代 桂木美由紀 川原美穂
石井久己 サトウ矯正歯科クリニック (有)鞍手總
合医学社熊井鶴子 豊田直也 松下竜一 島田良
雄 遠藤礼子 平島憲子 花田アサノ 西本健
井上輝美 福内康代 野中孝子 山崎末吉 吉森
康隆 田村志子 小野田京子 網田俊子 谷口睦
小川美沙子 深堀ミチ子 山下亜樹 田口常幸
日高太 園久美子 横井美佐子 水車村農園 吉
田佳織 高木裕子 林田英明 医療法人かどもと
眼科医院加登本拡 チエルノブイリのかけはし十
勝三木悦子 岸川美好 志和格子 村上和代 清
水伸子 伊藤利恵 仲美和子 力丸邦子 宮崎優
子 川嶋由紀 伊達みえ子 金子ミヨカ 馬庭京
子 野村啓子 増本亨 長野淑子 森智子 沖・
中西・前田 日本キリスト教団八幡鉄町教会 山
本慶子 武田孝子 奥平篤子 川島則子 首藤展
子 中村幸枝 飯野直美 大園広子 相川美智子
谷村牧子 井手公平 土持秀男・由利子 有吉み
どり 伊東眞司 吉田純枝 山路まり子 PEC
春 山下千賀 新納ゆかり 波多野満寿美 添田
福美 稲吉清子 丸尾匡宏・英子 田中順子 渡
辺喜美江 野曾原和恵 朝永洋子 熊本YWCA
中村照子 堀之内真吾 水車むら農園 華井紀子
宮崎聖一 教会 舞鶴幼稚園 吉川貴子 平泉悦
子 英空寺 グリーンコーポ生活協同組合くまも
と グリーンコーポ生活協同組合ひろしま グリ
ーンコーポ生活協同組合おおいた 松本豊 グル
ープモモ 脇坂みどり 澤田和子 渕レディスク
リニック 高知土と生命を守る会 前田晶子 輿
水正人 岡田薰 清水敦代・山平 大工原千春
内藤安子 比田井むつみ 柳葉翼 松本弘子 河
野知暁 岩原珠美 堀田徹子 筑豊互助会 工藤
美智子 青木君恵 中村恭子 三本和 チエルノ
ブイリ友の会伏尾台・菊池
ほか多数

(二〇〇一年一二月四日より二〇〇二年二月二二日
までの募金です。通信にお名前を紹介することを
ご許可頂いた方、ならびにチエルノブイリ支援コ
ーヒーの購入を通して活動を支援下さった方のみ、
掲載しています。)

三千円コース 四八六、〇〇〇円 (一六二口)
五千円コース 二八〇、〇〇〇円 (五五口)
一万円コース 三三三、一〇〇円 (三三口)
その他カンパ 一五一、〇五五円 (四〇口)
(分割払いの人もいるので、数字は割り切れていま
せん)

合計 一、二五〇、一五五円

募金者からのメッセージ 一部抜粋

●平和につながる活動と共に頑張りましょう。
●息の長い活動だと思います。チームの
信念に感動します。●事務局の皆様おすこや
かでよき働きを祈ります。●応援しています。
わたしにできることはこれくらいですが、が
んばってください。●世界に平和がおとずれ
ますように。●息の長い支援活動を続けてお
られる皆様に敬意を表し、心ばかりの気持ち
をお送りします。●チエルノブイリの子ども
たちの幸せを祈ります。●もつとたくさん支
援できればよいのですが、少なくてすみませ
ん。でもずっと支援を続けます。被爆した子
どもたち、その後に生まれた子どもたちの健
康を心より祈ります。●チエルノブイリの事
故からやがて一六年新しい戦争と原発の関係
も怖いです。●ヒロシマの被爆者として傷み
は最後にしてほしい。●(コーヒーや)贈つ
た方に喜んでもらっています(感心されたり...)
●我が家も募金で助けられたことがあります
す。そのお返しに。